豪農の暮らしを今に伝える町並み

大津町陣内地区
【町並みの分類／農村】

江藤家住宅（外観）

町並みについて

◆大津町に散在する江戸期の「在御家人」（郷士）の住宅の中でも、最も大型で、建築年代が古い江藤家住宅を中心とした農村の町並みがみられます。

◆江戸初期に細川藩は大津を中心とする白川中流域を灌漑しようと、下井手、上井手などの大規模な水利事業を実施したことから、17世紀中ごろから陣内地区も豊穣の地に変身しており、高い農業生産力をもつ農村として発展しました。

町並みの中心（核）となる伝統的建造物

江藤家住宅 国指定重要文化財

◆主屋は、広間部や土間をはじめ、座敷部と居室部が見事に組み合わさっており、複雑な外観や意匠的に優れた座敷で構成される、大規模で質が高い建造物です。

◆長屋門から蔵、馬屋などの付属施設が主屋を取り巻くように配され、水路や石垣を含めて江戸末期の屋敷全体の構成をよく保っています。

贅を尽くした書院造りがある主屋内部

◆重厚な構えをみせる屋敷を守るように、北西隅から北東隅にかけて切石積の石垣が築かれています。また、北辺を流れる水路は、敷地内に取り込まれ西方に流されており、住宅の美しさを引き立てています。

江藤家住宅は、白川北岸の肥沃な田園を背景にした豪農住宅としての面と、地域の生産力が向上するのに合わせて成長してきた武家屋敷としての表情を併せ持っています。大津地方で第一の屋敷であった江藤家住宅が農村集落の核として、往時の面影を静かに伝えています。